

特別支援 教育

校内で「最も適切な学びの場」の検討を！



成長

今の状況のままでもいいのでしょうか。

令和5年度から、特別支援学級・通級による指導の適切な運用が求められるようになりました。全ての障害のある児童生徒に対して、下図のプロセスを適用し、市町村教育委員会や各学校では適切な学びの場を提供することが必要です。「一人一人の教育的ニーズに応じた児童生徒の適切な学びの場の決定や見直しに係る基本的な考え方」を再確認しましょう。(令和5年度学校教育指導方針)

お願い
します

学校においては、児童生徒の障害の状態等を常に把握し、障害等に応じた教育課程の編成等の検討を継続することが大切です。

就学時に、小学校段階6年間、中学校段階3年間の学校や学びの場(※)が固定されてしまうわけではありません。就学後の学びの場をスタートにして、可能な範囲で学校卒業までの育ちを見通しながら、小学校段階6年間、中学校段階3年間の就学先となる学校や学びの場の柔軟な見直しができるようにしていくことが必要です。そのためには、児童生徒の実態把握等を適切に行い、学びの場の変更や転学ができることを、保護者を含めた全ての関係者が共通理解して進めていくことが大切となります。

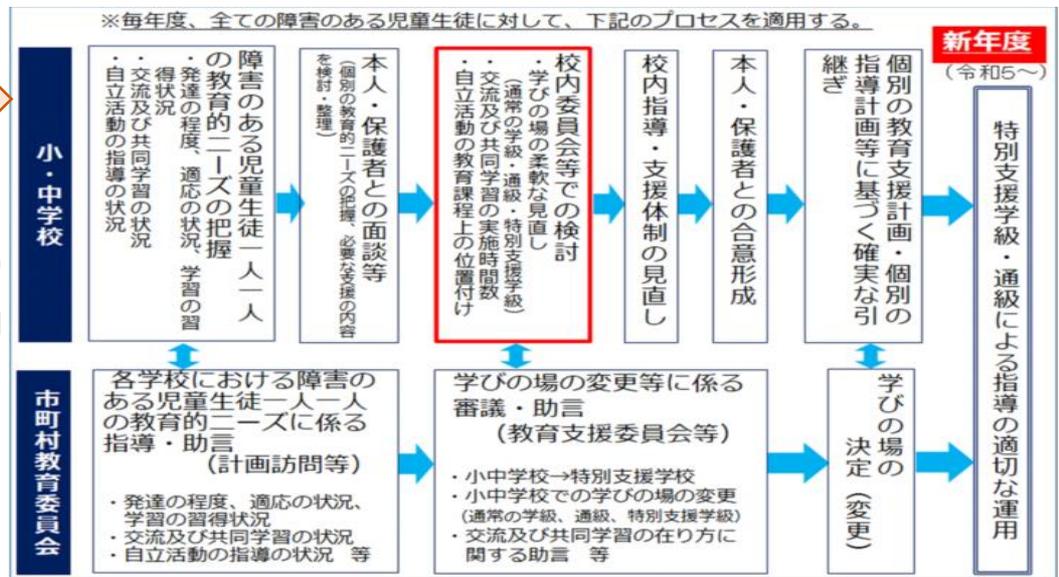
【例】特別支援学級(自・情) → 通級指導教室(自校通級) → 通常の学級
通常の学級 → 特別支援学級 → 特別支援学校

※学びの場：通常の学級、通級(自校・他校・巡回型)、特別支援学級、特別支援学校 等



<図>
適切な学びの場の
検討プロセス

学校の役割は？
市町村の役割は？



【春夏冬話コーナー】

Mちゃんとの思い出

以前勤めた小学校で、私は、毎朝、交通量の多い交差点で立哨しながらあいさつ運動をしていた。天然のスキンヘッドで体もごついので、怖がられないようにできるだけ笑顔で、「おはようございます。」「今日も元気だね。」などと言葉かけをしていた。そんなある日、学校の西側から登校して来る1年生の女の子Mちゃんに、少し屈みながら「おはようございます。」とあいさつした時のことである。Mちゃんはいつもと違って不機嫌そうに目を細めながら、「なんだ。ピカピカじゃねえか。」と返してきたのである。私は思わずウッと詰まってしまった。朝日をバックにしてあいさつしたのだが、Mちゃんの目には、私の頭と朝日が重なり、まるで後光が差したように光り輝いて見えるのであろうと、とっさに判断した。私は「Mちゃん、校長先生の頭がピカピカに見えたんだね。Mちゃんは、嘘はついてないよね。」と言った。Mちゃんは自信たっぷりに「うん。」と頷いた。「でもね、Mちゃん、少しひどくない？」と続けて聞いてみた。Mちゃんはハッとしたりするように「うん。」と頷いた。続けて私が「じゃあどうする？」と問うと、Mちゃんは「ごめんなあさい。」とお辞儀してきた。笑顔で「よし、ゆるす。」と言った私に、Mちゃんは、にやあと何とも言えない笑顔を向けて、校門に向かって行った。

何ら教訓じみた内容でもなく、感動もない話だが、学校で教えることの大切なものとして「TPOに応じた表現力だな。」と思えた出来事であった。

毎日暑い日が続きますが、先生方におかれましては、くれぐれもご自愛くださいませ。(by Y. Y)